

みんなで考える、これからの放課後。

# 放課後 マガジン

公教育日本一を目指して  
“分けない工夫”で叶える  
地域とつながる学校

連携の流れは各地に拡大  
自治体×地域で挑むさまざまな取り組み

地域連携事例 台東区立忍岡小学校

「こどもまんなか社会」を目指して——  
3つの成功例に学ぶ、  
地域連携を進めるヒントとは

Interview  
学校と放課後を子どもの権利実現の観点から見直す  
池本美香氏



特集

地域連携と学校施設活用  
子どもたちの居場所づくりを

Vol.2  
2023  
OCTOBER

放課後マガジン

Vol.2

2023. OCTOBER

編集・発行：特定非営利活動法人 放課後 NPO アフタースクール  
〒113-0033 東京都文京区本郷 1-20-9 本郷元町ビル 5F TEL: 03-6721-5043 (代)

## INFORMATION

放課後 NPO アフタースクールからのお知らせ

アンケート 皆様の声をお聞かせください！

『放課後マガジンVol.2』を手にとっていただき、ありがとうございました。  
冊子・記事内容について、ぜひご意見をお聞かせください。  
ご回答いただいた方には、今後、当団体が開催するイベント・勉強会のお知らせをお送りいたします！

- ・今後取り上げてほしいテーマ
- ・気になる自治体の取り組みや、取材してほしい自治体の取り組み (自薦他薦問わず)

● アンケートフォーム： <https://forms.office.com/r/DWQxH3Qp1X>

アンケートフォーム



お知らせ 第5回放課後勉強会を開催いたします。

テーマ：多様な子どもの育ちを支える地域の力

日時：2023年10月20日(金) 10:00～11:50 オンライン開催・無料

※アーカイブ配信あり

パート1 「地域の大人の願いと子どもたち」…千葉市、南あわじ市、台東区

パート2 実践事例共有「地域の力とともにつくる放課後の活動と学校施設活用」…千葉市、東京都・神奈川県のアフタースクールなど

パート3 「子どもの育ちを地域ぐるみで支えるために」…文部科学省総合教育政策局地域学習推進課地域学校協働推進室

● 申込締め切り：10月16日(月) 第6回放課後勉強会「多様な人でともにつくる放課後実践の可能性(仮)」は2024年2月頃を予定しております。

三鷹市教育長、北海道安平町地域プロジェクトマネジャーが登場！  
地域連携・学校活用の事例をさらに詳しく知れる  
オンラインフォーラム開催

日時：2023年11月14日(火) オンライン開催・無料

第一部 13:30～14:15 第二部 14:20～15:00 (終了時刻は変更になる可能性があります)

詳細はこちらから



次号  
予告

『放課後マガジン vol.3』は、2024年2月発行予定です。

特集テーマ：「子どもたちと共につくる、つながる放課後」

11月14日開催オンラインフォーラムのレポート、インクルーシブな居場所を目指す現場の挑戦、放課後でつながる人々のご紹介など、ぜひ次号にもご注目ください。

放課後 NPO  
アフタースクール

編集・発行：特定非営利活動法人 放課後 NPO アフタースクール  
助成：公益財団法人 日本財団

〒113-0033 東京都文京区本郷 1-20-9 本郷元町ビル 5F  
TEL: 03-6721-5043 (代) / Eメール: [kaihatsu@npoafterschool.org](mailto:kaihatsu@npoafterschool.org)

制作協力：株式会社都恋堂 ※本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

本冊子は、日本財団様の助成により作成しています。



放課後マガジンに掲載の記事や団体の日々の活動の様子を公式noteでも発信しています。  
<https://note.com/npoafterschool>

# 地域と共に子どもたちの居場所づくりを ～地域連携と学校施設活用～

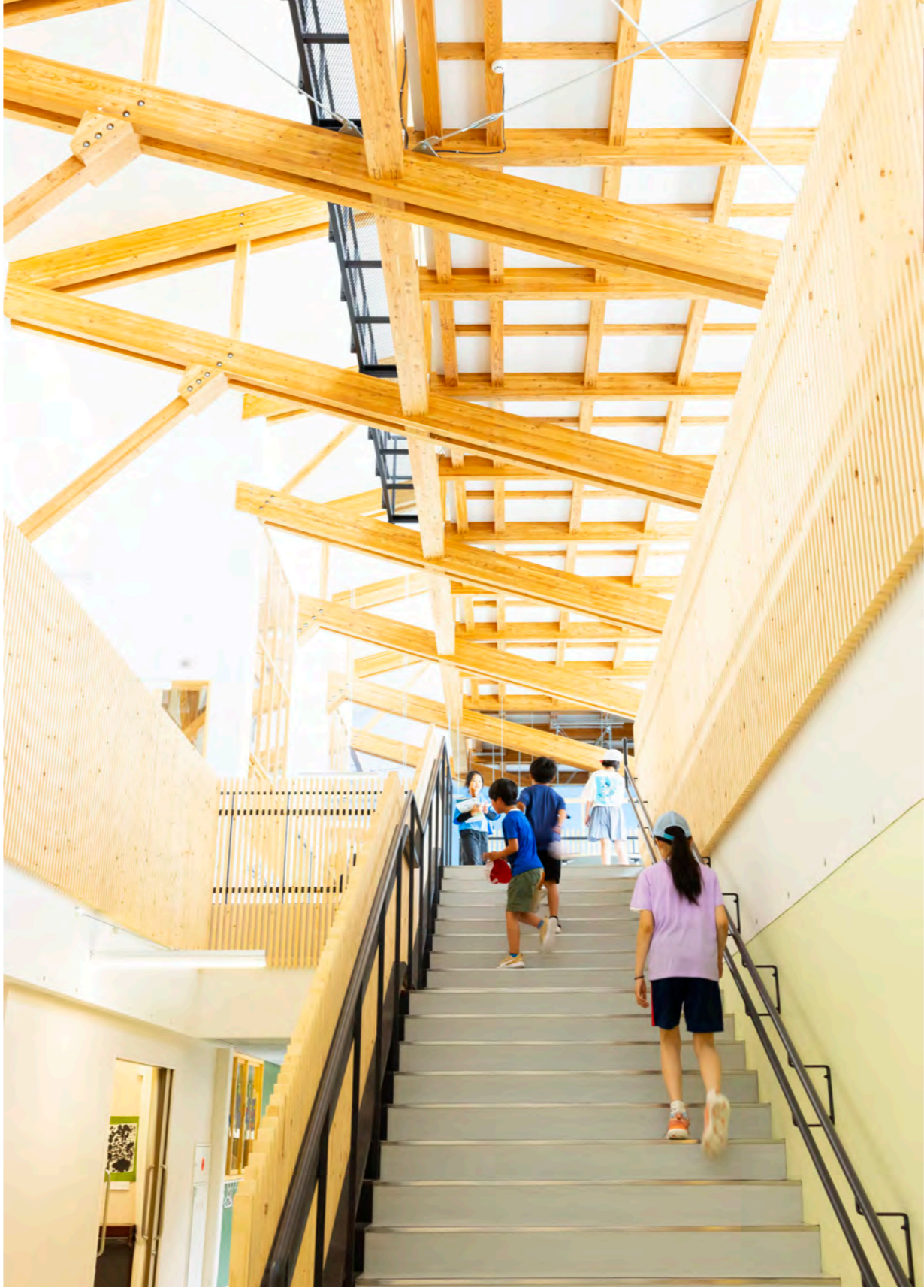
北海道  
安平町

公教育日本一を目指して

## “分けない工夫”で叶える 地域とつながる学校

子どもたちの居場所づくりに欠かせない地域との連携。大きな災害を機に、これからの「学び」や「子育て」のあり方を町ぐるみで考え、新たに義務教育学校を建設した北海道安平町に、そのヒントを探しにいきました。

木がふんだんに使われた温もりある校舎。梁や天井はあえて露出し、建物の構造に興味を持てる造りに



### 「早来学園」は 地域みんなの学校

小学生と中学生が並んで楽しそうに本を読み、そのすぐ横では大人たちが真面目な顔でビジネスの相談をする。北海道安平町にある町立早来学園では、そんな光景も当たり前になりつつあります。

2018年に発生した北海道胆振東部地震で、最大震度6強を記録した安平町。早来地区にあった早来中学校は校舎、グラウンド共に被害を受け、授業が再開できなくなりました。これを受けて町は早来中学校と早来小学校を統合する新たな学校建設を構想し、最終的に近隣の2つの小学校も統合して、2023年4月に小中一貫の義務教育学校、安平町立早来学園が誕生しました。

学校建設の議論は、教育委員会や外部の専門家のほか、地域住民に子どもたちも加わった「新しい学校を考える会」が重要な場となりました。コンセプトは「自分が『世界』と出会う場所」。子どもはもちろん、大人も一生を通じて学び育つ学校に、という想いが込められています。

“大人も学ぶ”という理念のおり、早来学園は地域に開かれた学校になっています。学校の図書室は地域の図書室を兼ね、未就学児を連れた保護者が絵本の読み聞かせをしたり、大人がテレワークで使ったり。真新しい体育館や家庭科室も、予約をすれば誰でもアリーナやキッチン

エリアと児童・生徒が過ごすエリアがガラス戸で仕切られ、子どもたちは常に地域の大人たちの存在を意識しながら学校生活を送ります。休み時間には図書室などで大人たちと出会い、自然に交流が生まれる。みんなが使うものは子ども用、大人用と分けて全世代共用です。

かつての町づくりは、住民を世代で区切り、子どもには子ども用の施策、大人には大人用の施策を考えました。もちろん、人口が増えている時代はその方が効率的。ただ、過疎が進む大都市では分けられない方がむしろ効率的な場合が多い。「一回、分けないで考えてみよう」という視点を持つことは大切だと思います。

地域を巻き込んで…とは言うものの、学校側が地域に出ていったり、地域の人を学校に招こうとしたり、巻き込もう巻き込もうと頑張るのはパワーが必要。長く続けるのは簡単ではありません。

「だから、こちらからは積極的に働きかけません。いつの間にか出会っちゃう、関わっちゃう、つながっちゃう。社会の経済活動の中に子どもを含めていく。そんな仕掛けづくりに力を注ぐべきだと考えています」

この記事の詳細レポートは下記の二次元バーコードから!



### 新しい時代の学びに適したツールを活用



早来学園では、子どもたちの身体性に即した学びの環境も整えられています。対話的な学びがしやすい可動式の机や椅子、グループ学習時にはパーティションにもなるホワイトボードなど、文科省が進める「新しい時代の学び」も実践しやすくなっています。

スタジオ(調理室)として利用することができま。

懸念される子どもたちの安全は、最新のテクノロジーが守ります。同校では顔認証システムで登録者ことに入退室を制限し、部外者は子どもたちが過ごすエリアに入ることはできません。安心・安全を確保しながら、地域住民も利用しやすい仕組みを実現しています。

「顔」が鍵の代わりになるので紛失などのトラブルもなく、同校は鍵そのものがないとのこと。先生方の負担軽減にもつながっています。

### 社会教育が学校教育を後押しする町

町ぐるみの学校づくりが進んだ背

景にはこの町の歴史がある。そう説明してくれたのは安平町教育委員会の永桶憲義さんです。「安平町には昔から社会教育が学校教育を後押しするような土壌がありました。地域の中には『基幹産業である農業のことを、子どもたちにきちんと伝えるべき』と声を上げる人もいて、地元農家が米づくりについて教える『米学習』が始まった学校もありました」

安平町は2017年に制定された第2次安平町総合計画で、子育てと教育を町づくりの柱にすることを決定。民間企業との連携も始まり、さあこれからという時に、北海道胆振東部地震に見舞われました。

未曾有の災害で町の存続すら危ぶまれた安平町。しかし、このことで次への道筋も見えたと話すが、同教育委員会の井内聖さんです。

「地震が起こる前から町はさまざまな課題を抱えていました。公立だった保育園は入園者が減り続け、子どもたちが放課後に楽しく過ごせる場所もなかった。スポーツクラブにも人が集まらない。それぞれの担当者は頑張っているのだけど、相互連携はなく、各自が個別にやっている。

でも地震によって教育・子育て環境が壊滅的になり、みんなひとつにならなければという意識が芽生えました。バラバラだったパズルのピースが合わさるように、未来に向けた『大きな絵』が浮かび上がっていったんです。

こうして生まれた地域の連携が、町独自の教育プログラム『あびら教育プラン』につながっていきます。

あびら教育プランは、子どもから大人まで、全ての世代に「学び」を提供し、各々の興味関心に基づいた「挑戦」につなげるもの。学校教育と社会教育を地続きにして、人生を自らの手で豊かにする力を育みます。事業の運営を担うのは、町と連携する株式会社ファウンディングベースという民間企業です。同社のスタッフは安平町に在任し、「町民」としてさまざまな場面で子どもたちと関わります。

### いつの間にか つながっちゃう、が理想

地域連携の鍵は?という問いに、井内さんは「見える。出会う。分けない」と答えます。「早来学園では、町民が利用できる



永桶さんは福祉や財政など長く安平町の行政に携わり、震災の直前に安平町教育委員会の教育次長に就任した



地域プロジェクトマネジャーの肩書を持つ井内さん。ICTを積極活用した学校づくりを主導する

# 地域社会



## ●地域の商店

地域のジェラート屋さんで連携し、店内のイトインスペースで、読み聞かせや、工作ワークショップなどのイベントを開催しています。地域の夏祭りでは、アイスキャンディーのレシピを子どもたちがアイデアを出し合って考案し、売りもしました。



## ●市民先生

「しのわくスクール」では、台東区に在住・在勤のボランティアさんが「市民先生」として積極的に参加されています。また、最近では忍岡小の卒業生でもある近隣の中学生が来て、子どもたちと一緒に遊んでくれています。



## ●地域の居場所や団体

地域連携の一環として、2023年には小学校のPTAや近隣の児童館と一緒にイベントを企画。今後は近くの大学とも連携して、子どもたちが研究室を訪問して学びを深める機会をつくるなど、活動の輪を広げていく予定です。

## 忍岡小学校

### ●しのわくスクール(放課後子供教室)

「しのわくスクール」(忍岡小の放課後子供教室の愛称)では、子どもたちがやりたいことを中心に、たくさんのクラブが活動中。また大規模なイベントを児童が企画しており、2023年は文化祭「しのわくフェス」やスポーツイベントが子どもたち中心で企画・実施され、大いに盛り上がりました。



## 地域連携事例

### 台東区立忍岡小学校(東京都台東区)

# 学校を起点に、地域全体で子どもたちの放課後の居場所をつくる!

## 【校長先生の思い】



忍岡小学校 校長 松田正昭さん

子どもたちが安心して過ごせる楽しい場所があるのは、保護者の方にとって大切なこと。学校にとってもありがたい、しのわくスクールを通して放課後の子どもたちの様子がわかることも嬉しいですね。これからもお互いに相談し合って子どもファーストで、安心のスペースをつくっていききたいですね。

放課後NPOアフタースクールは、さまざまな小学校で放課後の居場所を運営しています。台東区にある忍岡小学校の放課後子供教室「しのわくスクール」もその一つ。ここでは学校の中だけでなく、地域全体が子どもたちの放課後の活動の場になっています。例えば「地域で書店プロジェクト」。学校の近所にあるジェラート屋さんとコラボし、子どもたちが考案したアイスキャンディーを販売しました。また、2023年には、忍岡小学校のPTAと池之端児童館の三者で、謎解きイベントやお化け屋敷を企画。お化け屋敷には100人以上の参加者が殺到し、子どもたちにとって貴重な夏の思い出づくりにつながりました。地域の人が市民先生として放課後の学校に来るだけでなく、子どもたちが地域に出て多様な人と関わることで、地域に子どもたちの居場所が増え、関わる大人の喜びにもなり、地域の教育力も高まる。そのハブとして、「放課後子供教室」が機能する。そんな地域連携による、放課後のあり方がこの地で生まれつつあります。

**地域の人の声**  
ジェラート屋さん  
みおさん

放課後の子どもたちの姿が街の景色の一つになることで「この街の子ども」という意識が広がっていったらと思っています。その子にあった困った時に相談できる大人・場所が街の中で見つかるようなきっかけを一緒に作りましょう!

**地域の人の声**  
地元の中学生  
Kさん

自分が小学生の時にしのわくスクールに参加したことがあり、今も時々遊びに行っています。子どもたちと遊んでいる時に「楽しい」と言ってもらえると、やはり嬉しくなって、「また来よう」と思っています。

**職員の声**  
しのわくスクール責任者  
白河榮さん

地域の一員として子どもたちと一緒に育てていきたいという思いをお持ちの方々にとって、放課後子供教室は参入のきっかけになりやすいのかなと感じています。今後も、地域のさまざまな団体と連携して、持続可能な居場所づくりを目指していきます。

**子どもの声**  
しのわくスクール 実行委員会  
Yさん(5年生)

私は実行委員会のメンバーとして、しのわくフェスや、スポーツイベントなどを企画しています。しのわくスクールは、自由で、自分のやりたいこと、こうなったら嬉しいなということができると、とても楽しいです!

## 関係者の声

# 連携の流れは各地に拡大 自治体×地域で挑むさまざまな取り組み

自治体と地域の連携により、子どもたちの教育や居場所を充実させていく動きが広まりつつあります。中でも先駆的な取り組みを行う東京都三鷹市と神奈川県川崎市の事業や課題への対応についてご紹介します。

## 東京都 三鷹市

### こんな取り組みをしています

- 地域の人財や保護者も学校教育に参画する「コミュニティ・スクール」
- 「コモンズ」の考えに基づく学校活用(学校3部制)
- 学校施設での市民向け講座の開催

教育における地域連携や学校施設の活用を推進。学校教育では保護者や地域の方々が学校運営や教育活動に参画し、学校運営について協議したり、授業サポートを行ったりしています。また、学校施設を地域の共有地「コモンズ」と位置づけ、今年度は夜間・休日に市民向け講座を開催予定。地域全体で子どもたちを育てています。

### お話をくださった方



三鷹市教育委員会 教育部 調整担当部長 松永 透氏

この記事の詳細レポートは下記の二次元バーコードから!



三鷹市では、2006年から市内全ての公立小・中学校を一貫教育校(学園)に。それぞれの学園に保護者代表や地域の方々からなる学校運営協議会を設置し、学校運営に参加する「コミュニティ・スクール」の取り組みを進めています。地域の皆さまは貴重な「宝」です。さまざまなスキルを持つ地域の方が学校に入ると、子どもたちの成長にも良い影響があります。地域と学校の協働による成功体験の積み重ねが、学校からの理解を得ることにつながると考えています。一方で学校の開放には防犯面のリスクも、使える教室を限定するなど設備や運用面の対策はもちろん必須ですが、「顔の見える関係」を学校や地域の中で築いていくことも大切です。当たり前のよう



図工室で地域の方と一緒に工作

挨拶や声を掛け合える校内の雰囲気をつくることは不審者対策にもなります。ナナメの関係から大人がいろいろな形で関わってくれた経験は、子どもたちの心を育てます。取り組みを通じ、子どもたちが学校や地域に対する誇りを持ってくれればと思います。

## 神奈川県 川崎市

### こんな取り組みをしています

- 地域教育コーディネーターの支援・育成
- 多様な地域人材の参画の仕掛けづくり
- 地域の寺子屋事業の推進
- 学校施設の有効活用

子どもたちの学習・体験を支援する「地域の寺子屋」、教室や特別教室等を開放する「Kawasaki教室シェアリング」、遊び場として校庭を開放する「みんなの校庭プロジェクト」など、さまざまに学校を有効活用。取り組みにあたって、保護者や地域の方との連携や子どもたちの声を大切に、共に支え、高め合える社会を目指しています。

この記事の詳細レポートは下記の二次元バーコードから!



### お話をくださった方



川崎市教育長 小田嶋 満氏

学校現場から離れ、川崎市宮前区長を経験した際に、地域にとって学校はコミュニティの拠点として大事な資源であると痛感する一方、どう活用し、地域と学校が連携を強めていくかという課題を感じていました。教育長となり、「学校施設のさらなる有効活用」、「学校・地域連携」という2つの役割を軸とした地域教育推進課を新設。学校施設を有効活用すべく、地域への校庭、体育館、特別教室等の開放をはじめ、来年度には川崎市立小学校全校で実施を予定している児童への校庭開放を積極的に進めています。特に校庭開放は、子どもにとって自由で魅力的な放課後の遊び場になるよう、ルールづくりも子どもたち主体で行っています。本市における地域との連携では、もともと「地域教育会議」という地域主体の組織があり、地域で子どもを見守り育てるという視点が根付いていたため、地域の寺子屋事業をはじめとする地域学校協働活動のさらなる推進や、地域ぐるみで子どもを育む取り組みが進んでいます。ゆくゆくは子どもたちが成人して見守る側へ、そんな地域の好循環が理想です。



放課後に校庭でのびのび遊ぶ子どもたち

「こどもまんなか社会」を目指して――

# 3つの成功例に学ぶ、地域連携を進めるヒントとは

異なる視点の掛け合わせで  
地域が変わるきっかけに

1日目は大阪府八尾市のものづくりエンターテイメント施設「みせるばやお」を創設した元八尾市職員の松尾泰貴さんと株式会社みせるばやおの代表を務める株式会社木村石鹸工業の木村祥一郎さんがご登壇。公民連携がテーマであることから、当日は産業政策課の方も来場されました。

最初はバラバラだった地元の中小企業を1社ずつ訪問し、ゼロから一緒に立ち上げた松尾さん。規模も業種も異なる企業が一致団結できたのは、「子どもたちのために」という利害に開かない共通の目標を掲げたからです。行政、民間の異なる立場で出会い、今は信頼で結ばれた松尾さんと木村さんのように、違う役割や視点を持った人たちが手を取り合うことで地域は変わっていきける。グループディスカッションでは、その



現在、各自治体で求められているのは「こどもまんなか社会」への取り組み。そのためには地域との連携が欠かせません。そこで放課後NPOアフタースクールでは、各市町村の事例を紹介しながら、実現に向けて何ができるかを学び合う勉強会を、2日に分けて大阪で開催しました。

## アフタースクール事業で地域の人も元気になる

2日目は「地域を活かす」「地域と共に」という視点から、放課後の現場に携わるお二人にお話を聞きました。まずは兵庫県南あわじ市教育委員会体育青少年課の柏木映理子さんにご登壇。当団体も協力させていただいているアフタースクール事業の開設時(2019年)から現状までを中心とした内容で、市内に15校ある小学校のうち現在は9校で実施、全校での開設を目指しています。

柏木さんによると、「まちの先生」が教えるプログラムは多種多様で児童にも保護者にも好評だそう。町全体で子どもを見守り、育てる意識を養うことで、地域の活性化は着実に進んでいるといいます。

## 「Win-Win」の交流で広がるコミュニティ

続いてのご登壇は、東日本大震災被災地となった福島県楡葉町で日本初の地域学校協働センターを立ち上げた猿渡智衛さんです。昨年4月



## 参加された自治体担当者の方々からこんなお声をいただきました!

### DAY 1

- 人口流出に歯止めをかけるために何ができるかと考えたとき、共通テーマとして、子どもを中心とした取り組みはいいなと気づきました。
- 行政はルールに縛られるところが大きいですが、それをどう解釈するか、どう突破していくかというお話に勇気づけられました。
- 企業との連携で市町村のメリットもあるとわかったので、トライしたいです。
- 「みせるばやお」への参加は会社の経営にもプラスになったということだったので、県内の企業さんにもこの事例を紹介していきたいです。
- 行政と民間の方がゼロから一緒につくることで信頼関係ができ、それが町づくりの原点になっているというのが大きなヒントになりました。

### DAY 2

- 放課後事業の人材確保は子ども大変ですが、教育学部の大学生に来ていただくのも一つの方法ではないでしょうか。
- かつて「学童っ子」だった子が、楽しかったからと高校生、大学生になって帰ってきてくれると、良い人材の循環になると思います。
- 地域の方に参加していただくには、敷居を低くするのが大切だと感じました。
- 小学校との連携がうまくいっていないのですが、教員の方とコミュニケーションをとって、放課後の活動を理解してもらえようになりたいです。
- 家庭環境に関係なく誰でも学べる場所を、他部署とも協力して、つくっていくことが大切だと確信しました。

この記事の詳細レポートは  
下記のQRコードから!



Day 2 (放課後現場)編  
Day 1 (地域企業連携)編

# Interview 学校と放課後を 子どもの権利実現の観点から見直す

こども家庭庁が創設され、「こどもまんなか社会」の実現に向けた機運が高まる中、これからの学校や放課後はどうあるべきか、海外の事例に詳しい池本美香さんにうかがいました。



### Day 1 地域企業 連携

写真左から放課後NPOアフタースクール 代表理事・平岩国泰、株式会社友安製作所 ソーシャルデザイン部担当執行役員・松尾泰貴さん、木村石鹸工業株式会社 代表取締役・木村祥一郎さん。当日は6府県の自治体ご担当者が参加されました

### Day 2 放課後 現場

(写真右)南あわじ市教育委員会 体育青少年課 青少年育成係長・柏木映理子さん。当日は5府県の自治体から青少年育成、放課後事業に携わる方々が参加されました  
(写真左)楡葉町 地域学校協働センター長 兼 教育委員会指導主事・猿渡智衛さん

◎ こども家庭庁が創設され、こども基本法も施行されました。「こどもまんなか社会」の実現に向けて、学校や放課後はどうあるべきですか?  
池本: 日本ではこれまで親の就労支援や女性活躍推進の目的で保育環境整備などの施策が進められてきたが、国が「子どもの権利条約」に基づき子どもへの施策を推進していく方向に舵を切りました。学校や放課後が子どもの権利条約の考え方に沿っているか検証し、子どもの意見を聴くことや、遊びの権利など子どもが本来持つ権利をどう保障していくか、という観点で見直す必要があります。

◎ 現状や課題を踏まえて今後、放課後ではどのような施策が重要でしょうか?  
池本: 子どもに何を保障すべきか、何が必要かという視点から「自分で自由に過ごせる放課後」を取り戻していくべきです。そのためには遊びの「時間」とともに、「空間」を考える必要があります。  
ハード・ソフト両面から子どもにとって魅力的な空間設計を

◎ 現在の小学生の状況や、小学生を取り巻く課題について教えてください。  
池本: いじめや暴力行為の件数は著しく増加し、小学生の不登校が増えています。さらに貧困率や虐待件数も増加、健康面では体力の低下や肥満率の増加傾向も見られ、小学生の状況は悪化しています。  
放課後については、待機児童という量の問題だけでなく質の問題もあります。大規模施設ですし詰め込み状態で過ごしていたり、長時間過

◎ こども家庭庁創設により、子どものことが一元的に行われる期待がある中で、地方自治体に期待されることは?  
池本: 「自分の自治体の子どものために何をすべきか」と考えれば、さまざまな人たちと連携していくことになり、連携すると財源の無駄遣いが減りますし、情報が共有した方が早期に支援ができます。子どもが求めていること、必要なことを考えるためには、余裕を持った人員配置と、行政や学校・放課後現場の方々の連携・情報共有を当り前にしていくことも必要かもしれません。

### イギリスの事例

#### 子どものための、子どもによる校庭デザイン

イギリスでは国が主導し、子どものための校庭づくりを進めています。緑が多く、座っておしゃべりする空間が設けられていたり、子ども自身がチャレンジしたくなる飛び降りや木登りができたりするところも。そんな多様な遊びができる居場所づくりには子どもたちも参加。そうすることで「自分たちの場所」という愛着が湧きます。

### オーストラリアの事例

#### 進む学校と放課後児童クラブの連携

オーストラリアでは放課後児童クラブの指針の中で、学校と放課後児童クラブの協力関係構築が促されています。公式・非公式な場での学校職員・放課後児童クラブ職員間のコミュニケーションが積極的にされることで、子どもへのよりよい対応や双方のスキル活用が見出せます。また、この指針を受け、小学校長会代表と放課後児童クラブの全国団体代表の連名で望ましい連携についてのあり方をまとめた文書が教育・雇用・職場関係省から公表されました。



**Profile** 株式会社日本総合研究所 調査部 上席主任研究員 池本美香氏  
1989年日本女子大学卒業、三井銀行入行。2001年より日本総合研究所。博士(学術・千葉大学)。海外との比較を中心に、子どもに関する政策について調査研究。著書に『失われる子育ての時間』『子どもの放課後を考える』『親が参画する保育をつくる』、共著に『保育の質を考える』など。現在、千葉大学客員教授、東京都こども未来会議委員、神奈川県子ども子育て会議委員。2014年より放課後NPOアフタースクールアドバイザー・ボードメンバー。

〈出典〉  
\*1 文部科学省「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査(小学校におけるいじめの認知件数)(小学生の学校理下・管理下以外における暴力行為発生件数)」  
\*2 文部科学省「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査(小学校における不登校児童数)」  
\*3 文部科学省スポーツ庁「令和4年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査」